

桜校長のア・ラ・カルト

折葉 沢居

神奈川県立Y高校の桜幸二校長はちよつと毛色の変わった経歴を持つ校長である。青壮年期の一六年間、神奈川県高教組の執行部に席を置き、書記長・委員長を歴任した後で教育センター研究部長を経て校長に任じられた。普通、校長は二校ほど教頭を経験してから校長に昇任するのだが、桜はその教頭経験が皆無である。

組合執行部経験者が管理職に登用されると、一般組合員の間には「執行部を踏み台にして管理職になった」という非難の声が囁かれる。桜は教頭や校長がどのようになんか任用されるか、たぐさんの例を知っているから、そうした非難が的はずれであることを誰よりも承知しているが、管理職になりたいと熱望する教員のやっかみも判らないことはない気がするし、新任校長の研修会などで顔を合わせる仲間から「彼奴は教頭を経験していない」おかしな校長だ、という白い眼で見られることにもさもありなんという顔で通した。彼を無視しようとする一部の視線に棘を感じることはあったが、その程度のことはいずれ実績の前に大方消えてしまう

と高を括って校長に就任した。

桜は新任校長が知らずに犯す「何でもオレが」という逸る気持ちを抑えて、まず、職員や生徒、学校そのものを知らうと努めた。幸い、長いこと組合執行部に席を置いたお陰で職員の大半について名前と顔が一致していたので、いつも気軽に声をかけることができるのだった。

こうして次第に学校や職員に慣れるにつれて職員の間からも声がかかるようになり、桜は生徒を対象とした特別講義を講じたり、PTA主催のコミュニケーションスクールの講師を務めたりするようになった。桜は教諭現職にあつたとき、しばしば生徒の自習監督でまったく初めてのクラスに出向くことがあつて、一校時単位の「読み切り講義」をいつも三、四は用意しておくよう心がけていた。担当教科が英語だつたこともあつて、「英語という言語の特性」「英単語学習法」「英語と聖書」といったテーマで四五分ほど話すことはお手のものと言つてよかつた。若い頃に苦労して積んだ経験は年を取つてからも忘れずに残っているもので、そ

のつもりになれば、少々の準備時間でこれらを再現することはさほど難しいことではないのだった。

一

創立後二〇年ほど経過したY高校は学区の中でも上位にランクされる学校になっていたから、いわゆる生徒指導・生活指導事案で校長訓戒を行うケースはさほど多くを数えなかったが、それでも月に二、三回は指導の網にかかってくる生徒が出来した。

桜がY高校へ赴任して初めて訓戒の場に立ったのは五月半ばのことだったが、対象の生徒は二年生の女子生徒梅田蓉子で、バイク乗車禁止規定違反という事案だった。Y高校では、特別指導を実施するという事案が発生すると、生徒指導部が事実調査を行い、指導原案を(臨時)職員会議に提案して、審議を経て特別指導を行うという段取りとなっていた。多くの場合、過去に指導の前例があり、大抵はその前例を踏襲して指導内容を決定するのである。特に悪質だと判断されない限り、生徒の指導要録に記載義務とならない校内運用の範囲に留める措置を執るのが普通である。生徒の懲戒については学校教育法に定めがあり、退学・停学・

訓戒とあるのだが、同じ訓戒でも法に基づく懲戒となると生徒の指導要録への記載と県教委への報告が義務づけられることになるのである。要録記載となれば、生徒の履歴事項となるから将来ある生徒に無用の瑕を負わせるのに忍びないというのが校内運用で生徒指導措置を行う理屈になっているのだが、これは建前で、本音は詳細な県教委報告を省きたいということにある。正式の事故報告などを持って県教委に報告に及べば痛い腹を探られる結果になるのがオチで何の得にもならないからである。

さて、梅田蓉子に対する指導措置のことであるが、指導部が臨時職員会議に提案した指導原案は、梅田が休業土曜日の午前中一〇時頃バイクに乗って通行しているところを本校家庭科教諭上田翠に目撃されて、校内規則違反の現場を押さえられたという事案において「校長訓戒・家庭謹慎三日・反省文提出」というもので、前例を踏襲した内容だったから、会議ではほとんど意見も異論もなく原案どおり決定した。

一九八〇(昭和五五)年頃から、高校生のバイク事故が全国的に広がり、神奈川県では全国ワーストワンの汚名を返上できない状況が続いて、そのまま放置できないとして、「免許を取らない」「車を持たない」「運

「転しない」という「バイク三ない運動」を發展させて、「乗せてもらわない」を加えた「四ない運動」、さらに「親は子どもの要求に負けない」をプラスした「四プラス一ない運動」などに取り組んで、社会的に高校生がバイク事故をなくそうとする運動が展開されていた。

桜は赴任して初めての事例でもあったので「梅田がバイクに乗っていた事情について何か特別なことはなかったか」と質問したが、指導部からは特にないという回答だった。職員会議で梅田についてコメントを求められた学級担任は、梅田が学習成績は中の上程度で特に問題はないこと、バイクは大好きで一六歳になるとすぐに免許を取得し、女子高校生バイクグループ『桜乙女』に属していてグループの副隊長を務めているらしいこと、そのバイクグループはいわゆる暴走族との縁はなく、バイク好きの女子高校生が休日などに集まってグループで乗車指導を受けたり、遠乗りなどに出かけたりしていること、などを報告した。

梅田蓉子に対する校長訓戒は翌日早朝、始業前に校長室で行われた。梅田には保護者同伴という規定どおり、父親の梅田透が付き添ってきていた。父親は学校から一〇分ほどのところにある商店街で酒屋を営んで

いるとのことだったが、特に悪びれるところもなく、といって卑屈な様子も見せず、穏和な表情を浮かべて腰を下ろしている。

生徒指導部長の事実確認に間違いがないことを梅田蓉子が認めたことを受けて、校内指導措置として校長による説論を行う段取りとなった。

「本校にバイク乗車を禁じる規則のあることは知っていますね」

「はい」

「先ほども確認があつたように、先週土曜日午前中にバイクに乗っているところを本校の先生に見つかったということだけれど、バイクに乗る特別な事情はなかったのだろうか。繰り返しの確認をするのは、単純に、規則違反・校長訓戒で済ませることはできないと考えているからです。法律上でも『校長および教員が児童等に懲戒を加えるに当たっては、児童等の心身の発達に応ずるなど教育上必要な配慮をしなければならぬ』と言っていますし、バイク乗車ということ自体は道路交通法で運転免許についての規定があるとおおり、一六歳で免許が取れることになっていますから、バイクを禁止するほうが特例なんですね。何か配慮すべきことがあれば斟酌するのは当然です」

「法律の中に配慮することと書かれていることははじめで知りました。そういうことなら、この間のバイクは、隣のおじいちゃんが自宅の二階の階段の途中から落ちて脚に怪我をしたから、病院へ急いで連れて行ってほしいと頼まれたためでした」

「そういう事情があったのなら、どうしてこれまでの事情聴取のときに言わなかったのかな」

「そういう事情を言っても言わなくても、バイクに乗ったことは事実だから、校則違反も間違いないと思っただからです」

「お父さんにお伺いしますが、今蓉子さんが言ったことは本当ですか」

「ええ、本当です。本来ならば私が隣のおじいちゃんを運べばよかったです、ちよつと急ぎの配達がかえていたものですから、蓉子が行くと言うのを止めなかつたんです」

「判りました。校長説諭の途中ですが、これは当然配慮事項に該当すると思われれますので、しばらく時間をください」

桜校長はそう断って、同席していた教頭・生徒指導部長・学級担任と別室で協議を行い、梅田親子の許に戻り、

「今回の校則違反・校長訓告の処分は白紙に戻すことにします。ただ、この指導措置は職員会議で決定したことですので、職員会議の了解を得なければなりません、私の責任で纏めますので、この場はこれでお引き取りください。なお、蓉子さんには、おじいちゃんを病院に連れて行った顛末について報告書を提出していただきます」

梅田蓉子父娘はともども桜校長の臨機の措置と適切な判断にすっかり魅了されて、こんな校長先生に出会ったのは初めてのことだとの思いを深めるのだった。

次に桜と梅田蓉子が同じ場を共有したのは、夏休み前の特別授業のクラスにおいてのことだった。Y高校では一学期末の成績処理に忙しい時期を利用して特別授業が実施される慣わしができていた。普段は大学受験を念頭に置いて授業が行われがちであるが、この特別授業は全学年を対象に受検に直接関わらないいくつかのテーマでセミナーが開催される。桜はこのユニークな試みが気に入って、『タテ社会の人間関係』というテーマで教壇に立つことにしたのだが、梅田蓉子もちよつと面白そうだと思つて、セミナーを受講することにしたのだった。

皆さんはこれまで「タテ社会」という言葉を聞いたことがありますか、という問いかけでその特別講義が始まった。集まっていた生徒は五〇人ほどだったが、三〇人ぐらいの生徒が手を挙げた。

「この言葉は今から三〇年ほど前、社会人類学者、当時東大教授だった中根千枝という先生が論文の中で使い始めたのですが、著書を通して広く知られるようになり、今では至極常識的な言葉として定着しています。今日はこのことについて別紙の資料を参考にお話したいと思います」と言いながら、一枚のプリントを配るのだった。

〔別紙資料〕

◇タテ社会の人間関係Ⅱ中根千枝Ⅱ◇

(一) 社会集団を構成する要因「資格」と「場」

・ どの社会においても個人は資格(教授・事務職員・学生)と場(R大学の者)(すなわち枠)による社会集団に属している。

・ 日本人の社会は「場」「枠」が強調され、「資格」はあまり問題にされない。

「家」

「一族郎党」

「国鉄一家」

「ウチの会社」

「オタクの社」

・ 枠によつて共通の場を基盤とする社会集団は資格を異にする者を内包する結果となる。

一体感によつて枠の強固さが養成されると、枠の外にある同一資格者との間に溝ができ、同時に、枠内の異資格者との距離が縮まる。

こうして、日本人の社会は集団の機能が強化されるに伴つてウチとソトの区別が進むようになっていくのだ。

・ 日本社会では個人の生活が、集団から地理的に離れて、毎日顔を見ることができないような状態に置かれると、集団から疎外される結果を招きやすいが、反対に、地理的に接近し、顔を合わせるチャンスが多いと、否応なしに集団に組み込まれやすく、一旦そうになると、集団構成員として、他の社会では見られないほど個人は束縛される。

・二つ以上の社会集団に同様のウエイトで属することは困難であり、ということは、単一社会だということに他ならない。場によって個人が所属するとなると、現実に個人は一つしか集団に所属できない。その場を離れれば、同時にその集団外に出てしまうわけであり、個人は同時に二つ以上の場に自己を置くことは不可能である。

(二) 日本社会は「タテ社会」

・場の共通性によって構成された集団は枠によって閉ざされた世界を形成し、構成員のエモーショナルな全面的参加により、一体感が醸成されて、集団として強い機能を持つようになるが、集団が大きいときは個々の構成員をしつかり結びつける一定の組織が必要である。日本人の場合、これは「タテ社会」であることが共通である。

タテ： 親子、上役と部下… 資格の異なる人を結ぶ
ヨコ： 兄弟姉妹、同僚 … 同質の者、同列の者

・タテ社会においては、同じ資格の者であっても、

「タテ」の運動に影響されて、「差」が設定され、強調されて、精妙な序列が形成される。

年齢・入社年次・勤続年数・先輩後輩という要素のほ
うが、職種・身分・位階などの要素より重い序列なのである。

・終身雇用制↓年功序列制を支えているのは、能力平等観にあり、差は「働き者」「怠け者」に見られる個人の努力差である。

この「能力平等観」に立てば立つほど、その結果として、序列偏重に偏らざるを得ない。「学歴一律主義」も極端な「学歴反対主義」も個人の能力差を認めないという点で同じ信念から生まれている。

・序列偏重が日常的であるのは、座席順、言葉遣い、発言順や量などを見れば明かである。

・この根強い平等主義のおかげで、個々人に自信をもたせ、努力を惜しまず続けさせることができる。「タテ」のリンクは、そうして努力してきた個人にとつて、またとない上昇の梯子を用意する。

・例えば、東大を通過することによって誰でも同列に立つことができる。教育機関が社会層の差をなくし、縮小するのだが、オックスフォードでは、下層階級の子弟は依然として下層階級であつて、教育機関が社会層の差に対して、さほどの機能を發揮しない。イギリスはタテ社会ではないからだ。

・「タテ」社会であるということは、あらゆる層において、同類の集団ができないということであり、同類が敵となるということである。並立するものとの競争が、仕事の推進力となり、その集団の結束を固めている。

みんな同じことをしないと気がすまない、競争に負けてはならない、バスに乗り遅れるな、となるのである。

一群一群が明確な集団を形成し、自己完結的なワンセットを構成している。構造的には、分業精神に反する仕組みとなっている。

何でも屋精神はすべての分野に見られ、出版界・放送・新聞・雑誌・デパート・総合大学など教育機関のあり方によく現われている。

・社会組織とは異質の政治組織も日本では「タテ」の組織を基盤としている。

・「タテ」集団は、底辺のない三角形で、その構造は常に外に向かって解放的であるが、「ヨコ」集団は、円形で、外に対しては閉鎖的である。

「タテ」は成員の個人関係によって集団が構成されており、「ヨコ」は人間以外の、ルールとか資格によって集団ができています。

社会組織の基盤となる人と人との関係のあり方は、「タテ」の関係、「ヨコ」の関係、「契約」の関係が代表的であり、「タテ」社会では、「契約」関係が育ちにくい。

・人と人との関係を何より優先する価値観を持つ社会は、宗教的ではなく、道徳的で、対人関係が自己を位置づける尺度となる。「みんながこう言っているから」「他人がこうするから」と言うことによつて、自己の考え・行動に示唆が与えられ、「こうしたことをすべきでない」「その考えは古い」というような表現で、他人の考えや行動を規制するのである。

「日本人社会は集団内部の序列意識が強く、その結果、横並び意識が強く働く。今の子どもたちの意識や行動様式は変わったとよく言われますが、先輩・後輩意識は昔以上です。

『皆と同じ』であることが行動の規範となり、『皆と同じ』であることを確認して安心することとなり、『皆と違う』ことを恐れ、『皆と違う』者を排除しようとする意識が働くのです。

男女、高齢者、外国人、障害者などに対する差別意識が根強いのも、いわゆる部落差別が未だになくならないのも、その現れと捉えられます。

『いじめ』もまた集団からの仲間はずれ＝排除・人権軽視を伴うことがあるという点で、差別現象の一種と言えるでしょう。

こうして、日本人の社会集団の特性がタテ社会にあるということから考えると、今社会問題になっている就職氷河期と言われる問題の解決が相当難しいのが判るでしょう。横並び意識や序列意識が根底にあつて新卒者優先という採用方式が定着しているからです。本気で就職氷河期の問題を解決しようとするれば、毎年の新採用者の中に何割かは既卒者を含むべしというようなルールの法律を作つて企業に実行させるようなこと

が必要でしょう。

今日は時間がありませんでしたので、中根先生の理論のほんの一端を紹介するだけで終わることになりました。興味のある方は中根先生の『タテ社会の人間関係』などに目を通してくださるよう薦めます。講談社現代新書に収録されています」

この特別セミナーを受けた梅田蓉子は自分の属しているバイクグループ「桜乙女」の構造や運営のことを考えると、校長によるタテ社会の説明がびつたり当てはまるのに芯から驚いて、本気で中根千枝教授の理論について勉強したいと思うのだった。もしかしたら、と蓉子は考える。社会現象を材料として社会構造の分析を目指す社会人類学というのはなかなか面白そうな学問だ、将来、この方面の研究に力を入れるというのは魅力のありそうな思いつきではないか、と思わず手を打つたのだった。

それから一年半あまり蓉子は蓉子なりに真面目に受験勉強に打ち込み、Y高校卒業と同時に社会人類学を学ぶためにM大学人文学部に入学することに成功した。桜校長はあの特別講義がこのような形で一つの実を結んだことを感慨深く受け止めるのだった。

桜がY高校に赴任してきたその頃、上田翠はもう二年越しの不倫の恋に落ちていて、心身ともに疲労困憊していた。相手は上田が顧問をしているバスケット部のコーチで、小島保という六歳年下の青年だった。小島はY高校の卒業生で在学中はもちろんバスケットの選手だった。大学を卒業して地元の信用金庫に就職し、バスケットのほうはY校バスケット部OBを中心メンバーとする社会人チームに属してプレイを続けていた。一九〇センチ近い長身を生かしたポストプレーに卓越し、一試合四九点の県高校生最多得点記録を保持していた。

上田翠も高校時代にバスケット部に入って活動していた経歴を持って、Y高校のバスケット部顧問になっていたから、時間があればコートに出て生徒と一緒に汗を流すことも多かった。身長は一七〇センチにやや足りないくらいで、女子一般の中では上背のあるほうだったが、バスケットの世界では小柄の部類で、速攻のときのカットインやミドルシュートを得意としていた。大学卒業と同時に県立高校に採用されて、Y高校

は二校目だった。結婚は二五歳のとき。相手は母親同士が親友という間柄で、翠がまだ小さいときから家族ぐるみで親交のあった上田優といい、翠より二歳年長である。優は大学を卒業して外資系の商社に入り、海外出張も度々という日を送っていた。優は引け目に感じるというほどではないが、どちらかと言えば中背のほうで、翠とは知人たちからノミの夫婦などと揶揄されている。

翠がY高校へ転勤してバスケット部の顧問になったとき、小島保は大学を卒業して社会人になったばかりのところ、二人はごく普通の顧問とコーチという間柄だった。特別な関係が芽生えたのはまったくの偶然のことだった。生徒に混じって練習試合をしていた小島が、リバウンドを取りに飛び上がって着地しようとしたとき、下に生徒が倒れていて、その生徒を避けるために無理な体勢で飛び降りたものだから、片足を捻挫し、おまけにもう片方の太ももに肉離れを起こしたのだった。練習に居合わせた上田翠はすぐさま小島を自分の車で病院に運び、治療を済ませた小島を彼のマンションまで送っていった。

捻挫と肉離れで動きの取れない一人暮らしの小島のために、翠は簡単に夕食の準備を整え帰宅した。家庭

科教師の上田にとつて食事の支度ぐらいはお手のもの
で特別なことをしたという意識はまったくないことだ
つた。その三週間後の金曜日、小島保が先日のお礼を
言いたくてと言つてワインを手みやげに上田翠のマン
ションを訪れた。

「先日は大層お世話になりました。お陰様で、今では
すっかり捻挫も肉離れも治りました。ワインはほんの
お礼の気持ちです。ご主人とお二人で召し上がつてく
ださい」

「わざわざお越しいただかなくてもよろしかったのに。
却つて散財させて済みません。あいにく主人は仕事で
海外なんです。どうぞゆつくりしていつてくださ
い」

「あ、そうですか」

「少し暑くなつてきましたから、汗をおかきになつた
んじやありませんこと？ 簡単にシャワーを浴びてき
てください。その間にワインのおつまみを作っておき
ますから。折角ですから小島さんの全快祝いといたし
ましよう。あら、どうぞ、遠慮なさらずに」

それではお言葉に甘えて、と言いながら、小島はシ
ヤワーを浴びに浴室へ行く。戻つてくると、なかなか
華やかな食卓の準備が整つていた。アボカドのサラダ

にはトマト、キュウリ、ズッキーニなどがマヨネーズ
仕立てで和えてある。やや厚切りのハムはカツに仕上
がつている。ジャガイモのきんぴらは半生が旨い。カ
リツと揚がつた揚げワニタンも美味しそうだ。

「あり合わせですから、ほんのおつまみ程度ですけれ
ど。さあ、召し上がれ」

そう言いながら翠はワインのコルクを抜く。

翌日は休日だという開放感もあつて、お持たせのワ
インはあつという間に空いてしまい、後はウイスキー
のオンザロックになつた。お酒は二人ともかなり行け
る口と思われた。しかしその時はそのお酒の勢いを借
りてだろう、気づいてみると、二人はベッドの中だつ
た。

「先生、ボクは先生にはじめて出会つたときからずつ
と先生が好きでした」

保にそんなことを言われて翠は舞い上がる気持ちを抑
えることができなかつた。

一度不倫の恋に落ちると、毎日が地獄と天国、悔恨
と歓喜の繰り返しになつた。翠が小島に傾いていった
のは、大きな体と力で抱きすくめられたという願望
からだったが、夫の優に取り立てて不満があるわけ
もなく、優を愛せなくなつたわけでもない。もちろん

優には申し訳ないという気持ちで一杯だ。小島に対しても、いつまでも不倫の関係を続けるわけにはいかないという思いがある。もし小島に結婚話が出るときが来ればもちろん喜んで身を引かなければならないとも思っている。小島に誘われると「今度だけ、これだけにしよう」と決意するのだが、しばらく間が空くと、自分のほうから携帯のダイヤルを押してしまうこともある。欲望を満たして我に返ると、夫や家族、生徒や父母に知られたらどうしよう、限らない不安に戦く他はないのだ。二人の関係を他に知られないよう細心の注意を払ってきたから、大丈夫だとは思うもののいつ思わぬところからアリの一穴が開かないとは限らない。

そういうときに桜が校長としてY高校に赴任してきたのだ。翠が折れそうになる心を何とか持ちこたえたのは、仕事に打ち込んだためだった。教科指導は言うに及ばず、校務分掌でも、部活動でも自分から進んで精一杯の努力を重ねることで活路が開けるのだった。

だから、その年のコミュニティスクールの企画をどうするか問題になったとき、翠は同僚の鈴木文恵と話し合っ、て、家庭科で引き受けることにした。ただ、「成人病予防のための食事」とか「介護食」とかのテーマで調理実習を中心に講座を開くのは少しパンチの

効かない意味合いがある。何かこれを補助する彩りはないかを模索しているところへ、桜校長から、「燻製講座はどうでしょうか。自己流ですけれども一五年ほどハムやベーコンを作っているんです。もちろん講座で他人様に教えるなどという経験はありませんが」という意向が届けられた。渡りに船とはこのことで、上田と鈴木は一も二もなく賛意を示し、関係者での協議を経て、調理実習と燻製講座という二本立てでコミュニティスクールが開かれることになった。

講座の案内を配ってみると結構人気も高く、四〇人募集のところ七〇人ほどの応募があり、桜校長は家庭科の二人の先生方とも相談して、同じ内容の講座を二回開いて希望者全員を受け入れることにした。受講者の中に八名ほどの男性がいたが、桜校長に心酔した梅田透もその一人だった。この八人はその後Y高校PTAの中に親爺倶楽部を作るときの中心メンバーとなっていたが、そのことはこの物語とは直接関係はない。閑話休題。

開講式に続く講義では、桜は格好をつけて「薫製の話」「スパイスについて」「バランスの取れた食事とは」などのテーマで一席ブツたものだ。

その大半は参考書の受け売りであったが、受講者の中

には真面目に質問する受講生もいて冷や汗三斗という状態であった。燻製講座の冒頭の挨拶で桜はちよつとしたやりとりを挟んでみることにした。ものは試し場を和やかなものにするこつと請け合いだと考えたのだ。

「皆さんは朝昼夜の食事を食べる際『いただきます』といういわば挨拶をするのが普通ですが、これがどういう意味かご存じですか」

「食事を作ってくれる人に対する感謝の言葉、『愛情をありがたくいただきます』ということじゃないかしら」

「そういう解釈もあるかもしれませんが、実のところ『命をいただきます』ということのようですよ」

そういう導入もそれなりに効果があったと言つてよいであろう。と言つのは、燻製の実習が始まつてみると、結構気楽に話を投げかけてくれる受講生が多く出たからである。

「燻製を始めてどのくらいになりますか」

「どんなきつかけで燻製を始めたのですか」

「これまでどんなものを燻製にしましたか、魚をやつたことがありますか」

などと、大層賑やか、かつ、和やかな情景が展開する仕儀となつた。

「そう、燻製を始めてから一五年ほどにはなりますね。きつかけと言えば、最初は手作りのソーセージができないか、と思つて羊腸を探したことなんです。簡単に入ると思つて肉屋さん聞いてみると、

ウチでは扱っていません、と言われるばかりで、手ばかりも何も教えてくれなかつたんです。あちこちに手を回して漸く羊腸を手に入れるたのは探し始めてから半年ほど経つた頃だつたと記憶しています。

この入手に手間取つたことがそれだけ執着心と呼び起こす結果となつて、印象に残っているわけです。苦労の末にできたソーセージは今にして思えば決していい出来映えのものではありませんでしたが、家族にとつても好評でした。

それからあらためて「ハムソーセージの本」という参考書を買ひ求めて勉強し、ハムづくりには手を着けるようになったというわけです。

これまで、ハム・生ハム・ソーセージ・ベーコン・スモークトチキンなどの肉系統の燻製を主に、他にはゆで卵やタコ・イカなどもやりましたが、お魚はほとんどやつたことはありません。

どうしてかと言つと、例えば、スモークサーモンなどは一五℃位の冷燻で処理することが必要なんですが、

小型のスモーカーでは庫内の温度が上がって温燻や熱燻になってしまい、煮えてしまうからなんです。

庫内温度が上がらない工夫にちよつと浮かんたことがありますので、その内挑戦してみたいと思っっています」

こうして話が弾むとさらに発展するというわけで、「校長先生はお家でもお料理しますか、家事もなさいますか」

「奥様お喜びになるでしょう、お幸せな奥様ですね」などという話になって行くのである。

燻製講座で桜はロースハムを取り上げた。いわゆる仕込みに手間と時間がかかり、熟成させるのに少なくとも五日間は間を置く。最後にスモーカーで五、六時間燻煙に付し、二時間ほどポイルしてできあがるという寸法である。肉は豚のロース。八〇〇グラムから一キロぐらいのブロックを用いる。スモーカーは手製でドラム缶から作った。これだと一度に二〇個ほどのロースハムを燻煙に付すことができる。

こうしてできあがったハムは受講生が一つずつ持ち帰るのだが、それとは別に全体の試食用にいくつかを余分に作った。二人の家庭科教員も興味津々で桜の燻

製講座に参加して助手を務めた。最後の試食会ではロースハムをスライスしたり皿に取り分けたりしなければならぬ。ハムだからパンかというところ、桜は和食を用意するという。献立は簡単で、ハムに野菜サラダ、後は白いご飯と味噌汁だけである。ただ、これらも桜が主導して全部整えた。

出来立てのロースハムは主菜に相応しい堂々たる存在となった。見事なピンク色でソースだの醤油だのという調味料は要らない。適当な塩味で肉質も柔らかかに仕上がっている。ポイルのとき温度が高いとばさばさして肉が割れてしまうことがあるのだが、八〇℃から八五℃に保ってポイルすれば間違いない。丁度美味しくできたというわけだった。受講生のみ人も満足げにハムを口に運んでいる。

サラダといえば今風でモダンな感じがするが、その実は野菜の塩のみである。キュウリ、茄子、白菜、キヤベツ、大根、人参などを千切りにして塩でもむ。これを固く絞って生姜のみじん切りを和えて仕上げる。

この固く絞るというのがミソで、握力が強くないと上手く絞れないし、味も出ない。その意味では男の料理である。昔からキュウリもみという一品があるが、これは塩でもんだ後砂糖で甘味をつけて酢のものにする

のが常道である。桜の塩もみは砂糖も酢も使わないが、なかなかさっぱりしたものである。彼はこれを密かに

「一塩漬け」と呼んでいる。

味噌汁は小さく千切ったレタス、細切りにした油揚げにトマトのみじん切りという具であった。

翠はこの味噌汁を飲んだとき、ハッと心を打たれる思いがした。レタスは火が入ってもしゃきしゃきした歯触りが失われていないのが驚きだった。庖丁を使わずに手で千切るのがいいというマニュアルどおりにできている。トマトを味噌汁の具にするとは、ついぞ考へたこともないことだった。しかも丁寧に湯剥きがしてある。トマトを味噌汁で食べると、ほのかな酸味がアクセントとなつて、独特の食感が楽しい。すっかり家庭科教員のお株を奪われた思いがして、翠は謙虚なへりくだった、心のシンとする思いを噛みしめた。

そしてこのとき、心に激震が走った。不思議なこと、あれほど苦しんだ小島保との不倫の恋の呪縛から解放されるのを実感したのだ。晩秋の夕方の柔らかな日差しが心なしか心地よかった。

無論のこと、桜はこの翠の心の葛藤のことは知る由もない。

三

梅田透は娘の蓉子が三年生になると同時に、Y高校PTA会長になった。進んで立候補して信任されたのだが、蓉子が卒業するまでの一年間、PTA会長として桜校長と一緒に仕事が出来たと思ったのだ。この校長とならきつといい仕事が出来ると思うと、いつか心がわくわくするのだった。透は蓉子が中学生だったときもPTAに関わったことがあるのだが、このときは失望の連続だった。中学ではPTA役員を人手として使う意識が強く、PTA独自の活動の自由がない感じなのだ。広報などの記事や内容についても、端から端まで学校の意見を押しつけてくる。それも有無を言わせない一方的なもので、原稿に手を入れるなどという生やさしい手法でなく、学校側が書いた原稿をそのまま採用させるというふうだった。そういう苦い経験があるものだから透は蓉子が高校へ入学したばかりのときは、PTA役員への勧誘を断っているのだが、桜校長との邂逅によって、またやってみようという意欲が湧いた。透は元々世話好きで人のいい人物だったから、会長になると、夏の甲子園野球の県予選などでは商売もののジュースなどを冷やして何ケースも球場に運び

込んで選手の応援に一役買ったりした。そのお陰かどうか、その年のY高校は五回戦まで勝ち進んで、公立の星などという賞賛の声を浴びた。

高校の課程ごとに作られる単位PTAが集まって、学区地区高P連ができ、県高P連が組織される。高P連の集まりは関東地区のレベルでも行われ、全国のレベルでも開かれる仕来りがある。

梅田透がY高校PTA会長になった年は関東大会が群馬県高崎で開催されたのだが、たまたまY高校が地区Pの持ち回り会長校になっていたこともあって、梅田は貸し切りバスを仕立てて近隣の高校のPTA役員を高崎大会へ引率することにした。学区には一五、六校があるのだが、そのうち八校ほどの役員がそのバスに乗った。一校あたりPTA役員が二、三名、学校側で校長か教頭のどちらかが参加する慣習である。五〇人乗りのバスが八割方埋まる状況となった。

桜は組合執行部にいた頃日教組や公務員共闘などの会議で全国各地へ出かける機会に恵まれたから、県外への出張は可能な限り教頭や他の職員に任せ、基本にしていた。それに普段PTAとの学校側窓口は校務分掌上のPTA担当と教頭が当たることになってくるから、この高崎大会へも教頭の松由紀女史に行っ

てもらおうことにした。なにがしかの骨休めになればという思いからだ。会長がバスの手配を依頼した旅行社で宿泊ホテルの面倒を見もらったから、バスグループは全員がJ亭に泊まり、関東大会の公式会議が終わった後ホテルに戻ってささやかな宴会が開かれた。

このときの集まりがバスグループの参加者に大きな印象を残したためだろう、地区に戻った後梅田会長を中心にJ亭会という懇親会が作られて、年末に忘年会が開かれたが、会長の校長だからという理由で桜もその会に招待された。J亭会はその後毎年四月と一二月に持たれるよう定例化し、参加者も次第に定着して一、二、三名で落ち着いた。Y高校からは梅田会長、桜、松の三名が例会に参加した。

Y高校教頭の松由紀。彼女は五〇を少し出たばかりで桜校長の着任を迎えた。常識的にはあと一校教頭を務めて校長に昇任する可能性が高い。将来を嘱望されている立場にある。教諭時代には事情があつて神高教の組合員ではなかったが、教頭になっていろいろ苦労を重ねる内に組合のことも理解が深まって桜校長の斬新な考え方に共鳴するところが多くなった。

例えば、と桜校長は言う。

「本校では一校時五〇分で平日六校時と授業のある土

曜日は四校時という時間割を持っているが、この内平日の二校時を括って一駒九〇分で運用すれば一駒について一〇分とその間の休憩時間一〇分の合計二〇分を短縮することができる。この時間を放課後に回せば、それだけ部活動の時間を増やすことができるのではないか」

「本校では体育館履きは別として、上履き下履きの二足制を仕来りにしているが、生徒の健康やこのところの道路事情などを考慮すれば一足制に移行することがいいのではないか。いわゆる下駄箱のための昇降ロスペースを空けることができれば、それなりの有効活用が見込めるのではないか」

「校則を守らせるというにおいて、先生方はすべての項目について一〇〇%達成することを念頭に置いていると思われるが、ものによっては八〇%でいいという目標にすれば、随分楽に指導することができるのではないか。飲酒・喫煙ということについては生徒の健康や将来の家庭生活などのことから、一〇〇%を目指すことは当然であるが、遅刻や欠席といった項目では一〇〇%を期待するほうが無理なのではないか。事柄によって目標値を設定することを検討してはどうか」

これらの考え方を聞くと松は目の洗われる思いを禁じ得なかつた。校長の考えだということを伏せて、先生方の意向を打診してみると、ほとんど関心を示さない。ウチのレベルの生徒では九〇分授業はとても保たない、とか、校則遵守の目標値を項目ごとに変えるのでは校則にならない、とか、皆どれも極めて消極的なのだ。口では教育改革などというきれいな事を言うのだが、その実、現状を変えることには警戒心を募らせる職員が多い。変えることで現行の勤務条件が悪化する怖れのあることにあえて踏み込もうとはしないのだ。

「こういうところが今の先生方の食い足りないところだわ。警戒心ばかり先行させては何も変えることとはできないじゃない？」と松は思うが、やみこみ突っ走っても先生方がついてこないことは自明のことだったから、時間をかけて少しずつ啓蒙していかなければと心を決めるのだった。

松由紀は元々生真面目な国語の教師で、お酒とか宴会などに進んで近づこうとはしなかったのだが、教頭に任じられてから、そうばかりも言っていられない機会が増えた。特にPTAの会合があると、終わったあと軽くビールで喉を潤すのを心待ちにしている役員も結構多いのだ。といって毎回そういうところに顔を

出すわけではないのだが、梅田透が会長になってからはその機会が一段と増えて、松はその愉しさを少しずつ実感するようになっていった。高崎大会のときも結構楽しかったという思い出がある。

主人が毎日のように社用の接待で遅いご帰還となるのだから、私だって、たまに羽目を外しても咎められることはないのだ、などやや不埒な想いが由紀の心をかすめるようになってくるのだった。

こうして三月の年度末を迎えた。学校が短い春休みに入った二×日の午後、松は年度末の雑務処理のために来校してきた梅田会長とかなり長時間に亘って打ち合わせを行い、新年度を迎える準備を整えた。一区切りついて、ちよっとホツとしたとき、桜校長が二人の前に顔を出して、「打ち合わせは済みましたか。お疲れでしょう。少し時間をいただいて簡単なご苦労さん会をやりませんか」と言う。校長に誘われて校長室へ赴くと、テーブルの上に酒とつまみが用意されている。「こうして三人が揃うと、花札の赤短を絵に描いたようですね。何かいいことがありそうな気がしてきました。ところでこれは秋田の太平山で、梅田会長のお持たせです。秋田には爛漫とか、高清水とか、両関など、個性的なお酒がたくさんありますが、太平山は美味し

いお酒です。本当ならお燗をつけてやるところですが、ここでは酒器も揃っていませんし、冷やでやっても結構行ける酒ですから、今日は冷やで行きましょう。何もありませんが、ちよっと喉を湿してください」と言って太平山を勧める。

校長によって用意されたつまみはそぎ切りにした平貝の塩焼き、校長得意の一塩漬け、牡蠣の天ぷら、三山葵(みつわさ)、手作りの海苔の佃煮というものだった。なかなかどうして、そう簡単なたまみではない。

「これはどれも美味しいですね。これは三つ葉ですか」と梅田。

「ええ。三つ葉のお浸しに山葵を摺って合わせ、もみ海苔を振っただけのものですが、ちよっと洒落ていますでしょ。簡単ですが、三つ葉はすぐ茹だつて伸びてしまえますから茹ですぎないように注意することが肝心なんです」

「海苔の佃煮は校長先生の手作りですか」

「はい。これは湿気てしまった乾し海苔を細かく切つて水に戻し、出し汁で煮たものですが、隠し味に柚子胡椒を混ぜてあります。柚子胡椒は初めて九州へ修学旅行の生徒を連れて行ったときに別府で見つけて買ってきたわけですが、以来、ほとんど切らすことなく愛

用しています。うどんやソバの薬味としても行けますよ」

「牡蠣のフライというのはよく食べますが、天ぷらとは珍しいレシビですね。何か謂われがあるのですか」

「カリッと揚げるのがミソなんです。これはメリケン粉ではなくて片栗粉なんです。衣をつけてしっとりさせて、ちよつと高温で揚げるのがポイントです」

三人で太平山一本を空けたところでご苦労さん会はお開きになった。少しし残したことがあると言う校長を置いて梅田会長と松教頭が連れ立って校門を出ると、折角の機会ですから行きつけのスナックへ寄つていきませんか、と会長が誘った。

「会長さんも校長先生もお酒は強いですね。まだ大丈夫ですか」

「ええ、もちろんですとも。商売柄結構飲みますから」

「では、ちよつとだけ、お伴しますわ」

折良く来合わせたタクシーを捉まえて梅田会長が行きつけのスナック・秋桜へ入った。時間はまだ六時半と早かったから秋桜は開店したばかりで、他にお客の姿はなかった。

「あら、ウーさん、いらっしやい。今日はすこぶるつ

きの美人とご一緒でお安くないわね」

「いや、そんなんじゃないんだ。この方はY高校の教頭さんで松さんという先生。PTAでいつもお世話になっているの。今まで、校長の手料理でご苦労さん会をやつてきたところなんだけど、すっかりいい気分になったものだから、ここへ誘つたというわけなんだ」

「そうでしたか。校長先生もお連れしてくださいればよかったのに」

「校長はまだ仕事が残っているんですと」

「ウーさん、この次は校長先生とご一緒でお願いしますわ。今つまみを出しますから、ちよつと待っていてください」

「そういうわけで、お腹はできているから、つまみは乾きものぐらいでいいよ」

「はい、はい。ではどうぞごゆっくり」

それから二人はゆつたりとブランデーを口に転がしながら、その年のPTA活動のこと、高崎の関東大会のこと、岡山での全国大会のこと、文化祭での出し物のこと、などの話に興じ、果ては桜校長の手料理のことなどに話題が飛んだりした。

「今日の校長さんの手料理はみんななかなか美味しかったですね。教頭先生は何が気に入りましたか」

「平貝の塩焼きと三山葵(みつわさ)」

「私も三山葵と牡蠣の天ぷら、あのふつくらとした衣が何とも言えない」

その日はそんな話が締めになり、カラオケを二人で二、三曲歌ってからそれぞれ帰宅した。松は心のどこかにひっそりと灯りの灯るのを感じるのだった。そして二人はメールの交換を始めるようになり、次第に親密な仲になっていった。一年の任期だけで梅田が会長を降りたあとも、例のあのJ亭会の集まりや、Y高校PTA役員OB会の総会や旅行会などで顔を合わせる機会がある。他に時間の折り合いがくと二人は秋桜で落合う。話は決まってあのとときの三山葵(みつわさ)から始まる。

「家内に作らせてみたのだが、どうしてもあのしやきつとした感触が出ないんだ」

「あれは三つ葉の茹でも大事だけれど、ぱりつとしたもみ海苔も疎かにできないようですわ」

そして二人は何時の頃からか二人だけの密かな時間を持つようになり、何年か経過した。桜校長はY高校に三年いて、次の高校に転勤していったが、松は周囲の期待に反して依然として教頭のままY高校に塩漬けになっていた。

そして、ある日。還暦間近の梅田透と松由紀の二人は示し合わせて出奔した。中年過ぎの色恋は止まないというが、透と由紀もそういう例になったのだろうか。県教委には松からの辞職届が郵送されてきただけだった。無惨にも二つの家庭を壊すとは社会人として無責任きわまりないことだが、思えば、二人が親しくなるきっかけは、あのご苦労さん会のあの三山葵(みつわさ)にあったと思われるのだ。しかしもちろん、桜幸二は自分があの二人を離れがたく結びつける火付け役を演じたなどとは夢にも思っていない。

二人の行方は杳として知れないままである。

了

二〇一〇・一〇・八脱稿
二〇一二・一〇・八加筆
二〇一三・五・一二加筆